

# 大学生の自我同一性の危機尺度作成の試み

森本哲介<sup>\*1</sup>

## A Scale to Measure the Extent of an Ego-Identity Crisis State In University Students

MORIMOTO Yoshiyuki

### Abstract

The purpose of this study is to develop a scale to measure the extent of an Ego-Identity Crisis State (EICS) in university students. The EICS scale is intended to measure the level of emotional distress each person has experienced in the present and past. This scale was administered to 287 university students. Their responses were analyzed using the factor analysis method. The EICS inventory scale is divided into three factors measuring personal, occupational and sex-role identities. Almost all students indicated having experienced both personal and occupational crises. As they grew older, the personal identity crisis score decreased. However, the occupational identity crisis score increased among both sophomore and junior students, while it decreased among seniors. Almost all students measured had no significant sex-role identity crisis. Those students indicating having experienced occupational and sex-role identity crises in the past, scored low in the personal identity crisis score at present.

[Keywords] ego-identity, crisis, adolescence

### 問題と目的

Erikson (1950, 1959) が提唱した自我同一性概念に関する研究は、これまでも多くなされている。その中でも Marcia (1966, 1976) の自我同一性地位 (ego-identity-status) の研究は、自我同一性に関する研究の主要な流れの 1 つとなっている。Marcia は、職業、宗教や政治イデオロギーについての、迷いや葛藤、すなわち危機 (crisis) の時期の有無という変数、およびそれらに明確にし、実現するための積極的関与がみられるかどうかという自己投入 (commitment) の有無という変数の 2 変数を設定し、同一性地位面接 (identity-status-interview) と呼ばれる半構造化面接を用いて自我同一性の達成度についての評定を行った。その後、Waterman (1982) は、1982年までの自我同一性地位の研究をレビューし、性差の検討や、学年による達成度の向上、自我同一性地位の変化のモデルなどをまとめている。

日本では、無藤 (1979) が初めて Marcia の面接法の追試を行った。無藤は、宗教や政治イデオロギーが日本人青年の同一性形成に強く関わらないことを指摘し、日本独自の自我同一性研究の必要性を示した。

さらに加藤 (1983) が、面接法では客観的で妥当な自我同一性地位の判定が難しいこと、および多数のデータ収集が難しいことから、尺度による自我同一性地位の判定を試みている。加藤は、Marcia の危機と自己投入の 2 変数に、将来の自己投入の希求という変数を新たに加え、3 変数から 6 つの同一性地位への分類をおこなっている。自我同一性に関する尺度は、その後も宮下 (1987)、長尾 (2005)、下山 (1992)、谷 (2001) らによって作成されてきた。

しかし、従来からつくられてきた自我同一性を測定する尺度の多くは、自我同一性の達成した感覚に焦点を当てた尺度である。そのため、自我同一性形成過程における、心理社会的危機の状態がわかり難かった。唯一、長尾 (2005) の

---

\* 1 立正大学大学院心理学研究科心理学専攻博士後期課程

青年期の自我発達の危機状態尺度は、危機の状態に焦点を当てたものであるが、因子数が14と多く、また、2項目から構成されている因子もあり、結果の解釈が難しい。そこで、自我同一性形成過程における心理社会的危機の状態に焦点を当てて、青年期のどこにつまずき、なにに悩んでいるのかを測定する尺度を作成することが本研究の目的である。

さて、自我同一性を一つの大きな概念としてとらえるのではなく、複数の領域から測定する研究もある。Erikson 自身は、自我同一性の形成要因として職業の重要性を主張しているが、日本においては、青年期に職業以外のものが自我同一性の形成要因になりうるという研究結果が報告されている。

たとえば、宮下と爲川 (1991) は、大学生の職業に対する価値意識と自我同一性の相関を調べているが、全ての因子で相関係数0.3以下を示し、有意でなかったところもあった。加藤 (1983) は、職業や政治イデオロギー、宗教イデオロギーの3つに加え、家族、同性の友人、異性の友人との関係、男(女)らしさ、勉強、趣味社会的態度および活動、生き方や価値の各領域を加えた計11領域の各々について、現在および過去の危機と自己投入の高さを尋ねている。その結果、生き方や価値、将来の仕事、勉強、異性の友人、同性の友人、男(女)らしさが自我同一性の形成に強く関わっていることが明らかになった。職業のみに焦点を当てた尺度では、自我同一性の形成を十分に測定することは難しいのである。また、楡木 (2003) は、青年期には達成すべき発達課題が複数存在することから、それらを自我同一性という一つの概念でとらえ、尺度で測定することが難しいと指摘し、B. M. Newman & P. R. Newman (1984) を参考に、個人、性役割、集団、職業、社会的同一性の5つの下位尺度に細分化した自我同一性尺度を作成している。

さらに、岡本 (2002) は、青年期の発達課題とされてきた自我同一性形成を青年期以降にも拡大し、青年期以降には、新たな領域が付加、あるいはそれまで重要だった領域を喪失していくという、アイデンティティ変容の視点を提示している。この視点は、アイデンティティを複数の段階的、領域的にとらえていくことの有効性を端的に示している。すなわち、形成過程が異なると考えられる領域を、それぞれ独立してとらえられることである。どのぐらいの年齢に、どのような状況におかれたときに、何に関する自我同一性の危機状態に陥るか、あるいは自我同一性形成が促されるかを測定できるのである。

以上のことから、本研究で作成するのは、以下の2つの基準を満たした尺度とする。

1. 自我同一性を達成した感覚を測定する尺度ではなく、自我同一性形成過程の中で生じる心理社会的な危機の状態に焦点を当てた尺度を作成する。
2. 自我同一性形成に関わるいくつかの領域を、下位尺度に設定して測定する。

自我同一性形成について、鑪は (2002) は「人は、人との関係性の中で、自己を見つめ」、「自分自身のあり方・生き方について悩んで様々な試行をしながら、いくつかの選択肢を検討して、自分自身の判断をしていき自我同一性が確立する」としている。また、無藤 (1999) は「葛藤したり、苦闘したりすること、つまり、自己確立の問題に正面から取り組み、自己探求をすることによって自我同一性が形成されていく」としている。よって自我同一性形成の過程における心理社会的危機状態から生じる迷いや悩みとは、単に「気にしたことがある」や「考える」というものではなく、懊悩するといっても良いかなり積極的な態度である。その悩みや不安、葛藤に対して、正面から取り組み、且つ、自分自身の選択をすることにより、自我同一性が形成されるのである。

## 方 法

項目の選択 加藤 (1983) によれば、自我同一性形成に深く関わっている領域は、生き方や価値、異性、同性の友人、将来の仕事、男(女)らしさである。これらの領域について、伊藤 (2000)、楡木 (2003)、Newman B. M. & Newman P. R. (1984)、鑪 (2002) を参考に自我同一性尺度を構成した。なお、危機に対する積極的な悩みの態度を表現するため、文末はすべて「悩む」とした。逆転項目は設定しなかった。全34項目。1つの質問項目に対し、過去の悩んだ経験の有無 (1 : 有 - 0 : 無) および、現在の悩みの程度 (1 : 全く悩んでいない ~ 5 : 悩んでいる) という、2種類の回答方法で尋ねた。

なお、過去に悩んだ経験は、自伝的記憶をもとにした評定である。自伝的記憶のあいまいさに関しては、佐藤 (1998) が自伝的記憶研究の立場から、Erikson, E. H., Erikson, J. M. & Kivnick (1986) や Marcia (1976) などに対して、すでに指摘していることである。すなわち、過去の危機状態を過小評価したり、過去の出来事を忘れてしまう可能性である。しかし、過去に自己探索の取り組みと選択の時期を積極的に持ったかどうかは、現在の自我同一性の形

成にとって重要である。過去の心理社会的危機状態を自覚することが、現在の心理社会的危機状態における選択や態度に対して影響を与えていると考えられるからである。よって、過去に悩んだ経験の有無は、自我同一性地位のように類型論的にあてはめるのではなく、現在の悩みの程度にどのような影響を与えているかについて検討するために用いることとする。

調査時期および調査協力者 2008年10月、大学生及び大学院生319名を対象に、集団式質問紙調査を施行した。手続きとしては、講義担当者の承諾を得て講義の最初の20分間に行った。初めに、調査についての説明と協力を求め、回答方法の説明をし、その後、質問紙に回答を求めた。回答自体に要した時間は約10分～15分であった。

## 結果

自我同一性尺度の構造 18歳～25歳までの回答のうち、記入漏れがあった回答等を除外し、最終的に287名（男性107名、女性180名）の回答を分析の対象とした。平均年齢は20.20歳（ $SD = 1.43$ ）であった。

自我同一性尺度の現在の悩みの程度に関する評定について、最尤法、パリマックス回転をもちいて因子分析を行った。因子負荷量が0.4未満、および、二重負荷の項目を除き、さらに3項目以下の因子がみられた場合に、因子数を一つ減らして再度因子分析するという手続きを繰り返した。その結果、解釈可能な3因子25項目が抽出された。3因子の回転後の累積寄与率は48.21%であり、十分に高い値を示した（Table 1）。

第1因子は、グループの中での自己の在り方や価値観の違い、また、自己の性格や個性についての因子である。榆木（2003）の個人的同一性と集団的同一性が内包されており、加藤（1983）の、生き方や価値および、異性、同性の友人との関わりを通しての自我同一性形成過程ととらえることができる。グループや仲間と、つまり人と関わることを通し

Table 1 自我同一性尺度の因子分析結果（最尤法、

|                                   | 対人的   | 職業的   | 性役割   | 共通性 |
|-----------------------------------|-------|-------|-------|-----|
| グループの仲間との人間関係について悩む               | .76   | .11   | .17   | .61 |
| グループでいると、どう振舞ってよいか悩む              | .75   | .01   | .14   | .59 |
| グループの中での、自分の評価について悩む              | .74   | .21   | .14   | .61 |
| 仲間にあるままの自分を見せて、受け入れてくれるかどうか悩む     | .72   | .14   | .10   | .54 |
| グループ内での価値観の違いについて悩む               | .68   | .06   | .21   | .51 |
| 自分の居場所がどこにもないと感じて悩む               | .66   | .07   | .17   | .47 |
| 周囲の他者と考え方が違って悩む                   | .65   | .12   | .24   | .50 |
| グループの中での、自分の役割について悩む              | .65   | .22   | .23   | .52 |
| 他者と接しているとき、自分が演技をしている気がして悩む       | .64   | .13   | .20   | .47 |
| 自分の性格について悩む                       | .51   | .22   | .14   | .33 |
| 自分の個性とは何だろうと悩む                    | .48   | .39   | .14   | .40 |
| 周囲の意見に左右されて行動していると悩む              | .47   | .24   | .14   | .30 |
| 自分が何のために生まれてきたのか悩む                | .41   | .16   | .33   | .30 |
| 将来、どんな仕事に就こうか悩む                   | .10   | .83   | .04   | .70 |
| 自分がどの仕事に向いているのか悩む                 | .20   | .81   | .04   | .69 |
| 将来つきたい仕事の内容がよくわからないため悩む           | .13   | .75   | .04   | .59 |
| 自分が得意とする仕事について悩む                  | .25   | .65   | .02   | .48 |
| 将来の仕事の選択肢が複数あるため悩む                | .05   | .49   | .11   | .26 |
| 働くことの意味や目的について悩む                  | .14   | .46   | .15   | .26 |
| 自分が男（女）であることに悩む                   | .19   | .00   | .86   | .77 |
| 自分の行動が自分の性（男性・女性）と一致していないように感じて悩む | .15   | .02   | .79   | .64 |
| 自分の性（男性・女性）について悩む                 | .20   | .07   | .68   | .51 |
| 自分の服装が自分の性（男性・女性）と合っていないと感じて悩む    | .24   | .06   | .60   | .42 |
| 男らしさ、女らしさについて考え悩む                 | .21   | .15   | .55   | .38 |
| 男性と女性の性格の違いについて悩む                 | .13   | .16   | .42   | .22 |
| 累積寄与率（%）                          | 22.37 | 35.53 | 48.21 |     |

て自己を見つめることからくる悩みは、鐘 (2002) の「人との関係性の中で自己を見つめる」因子であり、自我同一性形成過程における中核的な悩みであるといえよう。この第1因子を「対人的同一性」とする。第2因子は職業の領域であり、「職業的同一性」とすることができる。将来の仕事について、自分に適した仕事や、働くことの意味についての項目で構成されている。第3因子は、自らの性別、および、そこから付随する男(女)らしさに関する悩みであり、「性役割同一性」とすることができる。信頼性係数は、対人的同一性が  $= .91$ 、職業的同一性が  $= .86$ 、性役割同一性が  $= .82$ と十分な値を示した。

#### 自我同一性尺度の基本統計

自我同一性の各下位尺度得点を算出した (Table 2)。現在の悩みの程度は、下位尺度の合計である。算出方法は、過去に悩んだ経験については、下位尺度項目について過去に悩んだ経験があれば1点、なければ0点で、項目の合計得点を計算した。今後は、同一下位尺度の過去と現在の悩みについて区別するため、現在の悩みの程度を「同一性」と表記し、過去に悩んだ経験の有無を「-経験」と表記することとする。

現在の悩みの程度は、対人的同一性および、職業的同一性は、ほぼ釣鐘型の分布であったが、性役割同一性に関しては、低得点から高得点に向けて右肩下がりの分布であった。過去に悩んだ経験は、対人的-経験、職業的-経験では、右肩上がりの分布であり、大学生の多くがこれらについて悩んだ経験を有することが明らかになった。一方、性役割-経験では、右肩下がりの分布であった。性役割に関する悩みは、現在および過去の悩みの両方で得点が低く、得点分布をみても低得点から高得点に向けて右肩下がりの分布であった。多くの大学生にとって、自らの性や、男らしさ女らしさに関する事柄は、悩む対象ではないことがうかがえた。

なお、現在の悩みの程度と過去の悩みの経験の得点範囲が異なることから、以降の分析については、それぞれの得点をフィッシャーのz得点に標準化しておこなった。

自我同一性尺度の下位尺度間の相関係数については、Table 3に示す結果が得られた。男性では、対人的同一性と職業的-経験、また、性役割同一性と職業的-経験の間に有意な相関がみられなかった他は、全てに正の相関がみられた。女性は、性役割同一性と対人的-経験、職業的同一性と性役割-経験の間に有意な相関がみられなかった他は、男性とほぼ同様の結果であった。次に、性差の検討をおこなうために、相関係数の同等性の検定をおこなった。その結果、ほとんどの因子間で相関に大きな性差はみられなかったものの、対人的同一性と性役割同一性 ( $\chi^2 = 23.56, p < .01$ )、対人的同一性と性役割-経験 ( $\chi^2 = 53.79, p < .01$ )、そして性役割同一性と性役割-経験 ( $\chi^2 = 37.44, p < .01$ ) 間の相

Table 2 自我同一性尺度の基本統計量

|        | <i>M</i> | <i>SD</i> | 歪度    | 尖度   |
|--------|----------|-----------|-------|------|
| 対人的同一性 | 33.96    | 12.00     | .28   | -.59 |
| 職業的同一性 | 20.77    | 5.77      | -.56  | -.30 |
| 性役割同一性 | 10.05    | 4.64      | 1.53  | 2.32 |
| 対人的-経験 | 9.15     | 3.66      | -.85  | -.28 |
| 職業的-経験 | 4.59     | 1.58      | -1.31 | 1.26 |
| 性役割-経験 | 1.79     | 1.88      | .91   | -.30 |

Table 3 自我同一性尺度の男女別の相関

|        | 対人的同一性 | 職業的同一性 | 性役割同一性 | 対人的-経験 | 職業的-経験 | 性役割-経験 |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 対人的同一性 | -      | .43**  | .39**  | .41**  | .18*   | .11    |
| 職業的同一性 | .34**  | -      | .21**  | .32**  | .57**  | .19*   |
| 性役割同一性 | .60**  | .28**  | -      | .12    | .10    | .55**  |
| 対人的-経験 | .55**  | .22*   | .29**  | -      | .45**  | .42**  |
| 職業的-経験 | .00    | .58**  | .06    | .32**  | -      | .35**  |
| 性役割-経験 | .50**  | .26**  | .76**  | .49**  | .20*   | -      |

左：男性 ( $N = 107$ )，右：女性 ( $N = 180$ )

\*\* :  $p < .01$ , \* :  $p < .05$

関係数には大きな性差がみられ、それぞれ男性が女性よりも相関係数の値が大きかった。

青年期後期にあたる大学生は、自我同一性の形成過程において、徐々に自我同一性確立へと向かう段階である。したがって、一般的には学年が上がるにつれて自我同一性が安定し、危機の状態に陥ることは少なくなると考えられる。また、反対に、過去に悩みを経験した割合は学年が上がるにつれて増加するはずである。しかし、本研究で作成した自我同一性尺度は、自我同一性の様々な領域を含んでおり、すべてが同時期に達成されるのではなく、異なるプロセスを経て確立へ向かうと考えられる。そこで、Kruskal wallis の検定をおこない、学年による尺度得点の変化を調べた。なお、職業に関する因子に関して、大学生と大学院生が異なるプロセスをとり得る可能性を考慮し、大学院生6名（男性5名、女性1名）を分析の対象から除外した。

現在の悩みの程度をみると (Figure 1)、対人的同一性と職業的同一性は学年によって有意な差があり、対人的同一性は学年が上がるにつれて漸減 ( $\chi^2(3) = 13.43, p < .01$ )、職業的同一性は2年生、3年生は高く、4年生になると1年生よりも得点が低かった ( $\chi^2(3) = 16.79, p < .01$ )。性役割同一性においても、有意ではないが ( $\chi^2(3) = 4.23, p = n.s.$ ) 漸減する形を示した。

過去の悩みの程度をみると (Figure 2)、対人的 - 経験 ( $\chi^2(3) = 4.40, p = < .n.s.$ )、および性役割 - 経験 ( $\chi^2(3) = 5.68, p = < .n.s.$ ) では有意差はなく、職業的 - 経験のみ有意な結果が得られた ( $\chi^2(3) = 26.51, p < .01$ )。しかしいずれの尺度得点も学年による差異をみると、3年生で低い得点もみられるが、全体的には1年生から4年生にかけて得点が漸増している。

現在および過去の危機状態が対人的同一性にあたえる影響

自我同一性概念における危機の経験は、自我同一性の形成において取り返しのつかない事態に陥ったということではなく、同一性形成の中で選択の時期にさしかかったという意味をもつ。したがって、過去に選択した経験を持っていることが、現在の経験に影響を与えていることが考えられる。そこで、自己の中核的な同一性である対人的同一性に関して現在及び過去の悩みがどのように影響しているか、対人的同一性を従属変数として重回帰分析をおこなった (Table 4)。結果、男女ともに重決定係数の数値は高く、十分な説明力があると思われた。職業的同一性と性役割同一性は男女とも、対人的同一性に正の影響を与えていた。また、職業的 - 経験と性役割 - 経験では男女差が見られ、男性では職業に関して悩んだ経験が、女性では性役割に関して悩んだ経験が、現在の対人的同一性に影響を与えていた。さらに、職業的 - 経験と性役割 - 経験は、偏回帰係数が負の値を示しており、過去に職業や性役割に関して悩んだ経験を持っているほど、現在の対人的同一性に関する悩みは少ないことが明らかとなった。

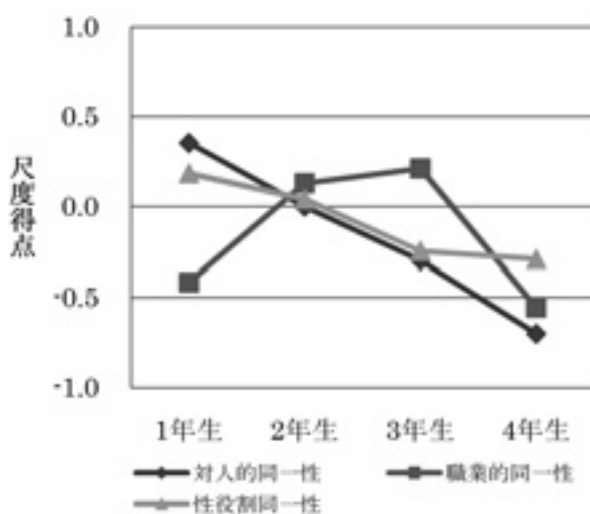


Figure 1 現在の悩みの程度

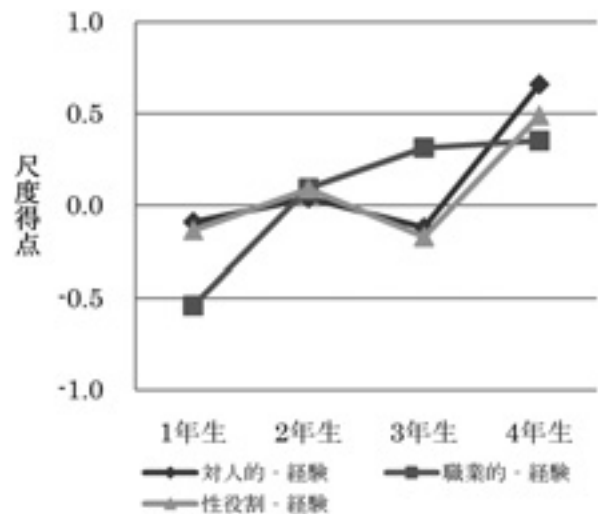


Figure 2 過去に悩んだ経験の有無

Table 4 対人的同一性に対する過去および現在の悩みの影響

|                    | 男性      | 女性      |
|--------------------|---------|---------|
|                    | 標準偏回帰係数 | 標準偏回帰係数 |
| 職業的同一性             | .35**   | .31**   |
| 性役割同一性             | .47**   | .48**   |
| 対人的 - 経験           | .51**   | .46**   |
| 職業的 - 経験           | -.37**  | -.12    |
| 性役割 - 経験           | -.13    | -.37**  |
| 調整済 R <sup>2</sup> | .60**   | .43**   |

左：男性 (N=107), 右：女性 (N=180)

\*\* :  $p < .01$ , \* :  $p < .05$

## 考察とまとめ

本研究は、自我同一性形成過程の中で生じる心理社会的な危機を、いくつかの下位領域に分類して測定できる尺度の作成を目的としておこなわれた。研究の結果、対人的同一性、職業的同一性、性役割同一性の3つの下位尺度をもった自我同一性尺度が作成された。それぞれの下位尺度の特徴を以下に述べる。

対人的同一性は、人との関わりの中で自己をみつめようとする際の悩みであり、自我同一性の中核的な悩みである。1年生に最も悩んでいるものが多く、学年が上がるにつれてほとんどの大学生が悩まなくなってくる。反対に、学年が上がるにつれて過去に悩んだ経験も増える。大学生期は自我同一性が確立へと向かう段階である。したがって、学年が上がるにつれて現在の悩みの程度が減少する、あるいは悩んだ経験が増えていくのは当然に考えられることであり、尺度の妥当性も示されたといえよう。

職業的同一性は、職業に関わる悩みである。1年生の時は低いが、2年生、3年生になると徐々に上がっている。そして、4年生になると、再び悩んでいないものが多い。すなわち、2年生で悩み始め、3年生で過渡期を経験し、4年生になると悩みを終えていくという、就職活動の開始時期が早くなっている現在の大学生を反映する悩みのプロセスなのである。これは、調査時期が10月であったのも関係していると考えられる。つまり、就職活動がスタートするに伴って、現実的に将来就こうとする職業や自己の得意とする仕事について、自己を振り返って悩むようになるのである。このように考えると、自我同一性の発達段階とは、年代によって分類されるものではなく、ある環境、ある状況を体験したかどうかによって分類されるととらえることもできよう。すなわち、ある環境、ある状況におかれ、それまでの自我同一性では乗り越えられなかったときに、心理社会的な危機の状態に陥るのである。そこで悩み、葛藤し、それまでよりも安定的な、新たな自我同一性を再形成するのではないかと考えられるのである。そうであるならば、自我同一性の形成や危機状態を一つの単一概念としてとらえるよりも、複数の下位領域からなる構造としてとらえた方が、より現状に即して自我同一性を捉える事が出来るのではないかと考えられる。

性役割同一性は、他の下位尺度と比べて得点が低い。ほとんどの大学生が性役割に関しては悩んでおらず、また過去に悩んだ経験もしていなかった。その中でも、学年による変化はみられた。学年が上がるにつれて現在の悩みは減少し、過去の経験は増加している。一般に、性役割に関する悩みは第二次性徴にともなって思春期に強くなるとされている。したがって、青年期後期の大学生にとっては危機状態に陥るほどの悩みではないと考えられる。しかし、今回の調査では多くの大学生が、過去に悩んだ経験もなかったと答えている。過去に悩んだ経験の有無に関する評定については、自伝的記憶に基づいた評定でなる。そのため、性役割に関しては、もともと悩む人が少ないのか、悩んだ経験に関する自伝的記憶の体制化に変化があったのかは、本研究だけでは明らかにはならず、自伝的記憶研究の立場から今後の検討が必要である。

さらに、過去および、現在の心理社会的危機の状態を自覚することが現在の自我同一性の形成に対して影響を与えるかについての検討を行った。対人的同一性とは自我同一性の中核に関する悩みであり、様々な領域の同一性が、対人的同一性に影響を与えていると考えられる。重回帰分析の結果、職業的同一性や性役割同一性に悩んでいるほど、対人的同一性に悩んでいることが明らかになった。これは、職業や性役割に関して悩む中で、自分の個性や役割、グループの

中での自分というものを改めてとらえなおしているとすれば理解しやすい。

また、職業や性役割に関して過去に悩んだ経験があるほど対人的同一性に関する悩みが低いという結果は、注目すべきである。危機の経験とは、それまでの自我同一性では自分を支えることはできないという経験である。前述したように過去に悩んだ経験とは、自伝的記憶であり、自覚である。職業や性役割に関して心理社会的な危機状態を経験したという記憶が現在の対人的同一性に関する悩みを低くさせているのである。「自分自身のあり方・生き方について悩んで様々な試行をし（鑑，2002）」、「葛藤したり、苦闘したりすること、（無藤，1999）」は、言い換えれば、自我同一性を形成する過程である。その過程を自覚し、同一性を再構成したことで、現在の自我同一性がより安定的に形成され、対人的同一性に関する悩みが低くなるのではないかと考えられる。

今後の課題として、本尺度の構成概念妥当性の検討の問題がある。本研究では、自我同一性の形成過程の積極的な悩みの態度を表現するために、質問項目の文末をすべて「悩む」と設定し、自我同一性形成過程に起こりうる心理社会的危機の状態を測定しようと試みた。学年による変化によって、一部の妥当性は検証されたが、十分ではない。まず考えられるのが、他の既存尺度との併存的妥当性の検討である。自我同一性の危機状態に焦点を当てた尺度は少ないが、抑うつや自尊感情、自己実現などとの関連が予測される。

対象を大学生以外にも広げて検証することも有効である。本研究では、対人的同一性や性役割同一性は、1年生をピークにして学年が上がるに従って漸減していた。これは自我同一性の形成過程を考えると当然であるが、このような変化の仕方は、対人的同一性に関する悩みのピークが大学生の前半か、それ以前にあるという可能性を示しており、高校生や中学生への調査も検討する必要がある。岡本（2002）は、青年期以降も同一性の重要な領域が新たに加えられたり、あるいは喪失したりして自我同一性が変容していくプロセスを提示している。青年期以降に関する調査を広げることによって、新たに重要になってくる領域の選定も期待されるであろう。

#### 引用文献

- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York : W. W. Norton. (仁科弥生訳1977 / 1980 幼児期と社会 (1・2) みすず書房)
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press, inc, New York. (小此木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). *Vital involvement in old age*. New York. (朝長正徳・朝長梨枝子訳 1990 老年期 生き生きしたかかわりあい みすず書房)
- 伊藤裕子 (2000). ジェンダーの発達心理学 ミネルヴァ書房
- 加藤厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- Marcia, J. E. (1966). Development and Validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- Marcia, J. E. (1976). Identity six years after : A follow-up study. *Journal of Youth and Adolescence*, 5, 145-160.
- 宮下一博 (1987). Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, 35, 253-58.
- 宮下一博・為川裕之 (2001). 青年の職業に対する価値意識と自我同一性 千葉大学教育学部研究紀要. 第1部, 39, 111-116.
- 無藤清子 (1979). 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27, 28-37.
- 無藤清子 (1999). 青年期とアイデンティティ 「自分」を, そして「ひと」を, たしかに感じること (鑓幹八郎・山下格編 アイデンティティ 日本評論社)
- 長尾博 (2005). 青年期の自我発達上の危機状態に関する研究 ナカニシヤ出版
- Newman, B. M. & Newman, P. R. (1984). *Development Through Life — A Psycho-social Approach — Third Edition*. Dorsey. (福富護訳 1988 新版生涯発達心理学エリクソンによる人間の一生とその可能性 川島書房)
- 榎木満生 (2003). 内容別自我同一性尺度についての研究 立正大学文学部論叢, 117, 1-17
- 岡本祐子 (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房
- 佐藤浩一 (1998). 「自伝的記憶」研究に求められる視点 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, 47, 599-569.

下山晴彦 (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究——アイデンティティの発達との関連で—— 教育心理学研究, 40, 121-129.

谷冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—— 教育心理学研究, 49, 265-273.

總幹八郎 (2002). アイデンティティとライフサイクル論 ナカニシヤ出版

Waterman, A. S. (1982). Identity development from adolescence to adulthood: An extention of theory and a review of reserch. *Developmental Psychology*, 18, 352-358